

地藏尊の熱烈な恋

羽生の上町（北小学校のところ）に観音寺（廃寺）の住職が勧進（きんじん）（寄付を集めること）して、宝永六年正月に建てたという地藏尊があります。下町（ジャスコの裏）には、上町より八年前の元禄十四年に江戸谷中の仏師三角利兵衛が鋳造したといわれ、六道（六観音）の多くの人々を導くという、やさしく円満なお顔をした地藏尊があります。

明治になって世の中は大きく変わり、人々のくらしはおだやかで平和なそのものになりましたが、羽生の町にはその頃、世にも不思議なことがおこり、町の人々はそのうわさばなしに振りまわされました。

下町のやさしいお顔の男性の地藏尊が上町の女性の地藏尊に思いを寄せられ、草木もねむる丑三時（午前3時ごろ）に、毎夜お通いになるというのです。それはそれは、俗人衆の様に密かな恋とちがひ、仏の何事もなし得る神妙な力の御身体ですから、真赤な火の玉となって風をまき起こしうなりをたて、大地をこるがって上町地藏尊のもとにおしのびになるといいうわさです。

年寄りたちは「見てはならぬ」というが血気盛んな若者たちは、「今夜こそ、地藏の火の玉を見とどけたい」とか、「おれたちも恋に身をこがすほどの思いがしたい」などと近郷近在の話題になりました。

しかし、好奇心にかられた若者たちも、地藏のしゃく熱の恋をじゃますることはできませんでした。

大東亜戦争の味曾有の窮地にあった頃、資材の乏しいおぎなひに、金属製品は、梵鐘、仏像といえどもすべてが軍事供出され、軍用品に加工されました。下町の地藏尊も例外なく、お国のために召されたのです。おそらく戦場で白熱の玉となって、くだけ散ったのではないでしょうか。

昭和四十六年三月下町の奇特な人々によって、再び、二代目の石の地藏尊がまつられました。

※宝永六年（一七〇九年）

※元禄十四年（一七〇一年）

※六道：生きているものすべてが善悪の業によっておもむき住む、地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天の六つの迷界。六観音、六地藏六道の辻はこれに由来する。

